

# ヤボネシア・フリー・ウェイ



リレー連載

第4回

風見 正博（マサイ）

## えっ！これって俺が夢みてきた村じゃないか

今回は福島原発から24kmにある楢原人村で毎年満月祭を開催している通称マサイに、祭り後の片付けで忙しい時に書いてもらった。福島でいくつかのコミュニケーション体験をし、キャラバンにも参加したという彼が夢みてきたものとは、？



←俺がつくつた丸い小屋



40年以上も前に、ちょっと振り返ってしまうとこの40年というのは何故か笑ってしまう、俺達が20代のころは30歳以上は信じるな！とか言ってたのに今はもう60代半ばだ。そのころ“なまえのない新聞”に投稿している！ コミューンやりたいので畠、仲間求む！と。

福島県川内村（原発爆発で有名になってしまったがその当時は誰も知らない）のワカから連絡があり冬に一度下見に行つて春から共同生活orいそろうor研修生のような生活を始めた。近くにやはりワカの紹介で楢にはいった“もぐら”と言うグループがコミュニケーションをつくっていた。初めて行ったとき、何故かアキラに丸太を担がされ4kmくらい川沿いに歩いた。最後に丸木橋を渡ったところは電気もなにもないところだった。7,8人の若者がギターなどを外で弾いたりみんなおもいおもいのことをしているようだ、ここは何処？！弥栄の郷共同体を訪れた時のような緊張感はなく、これから新しい世界が開けていくような新鮮な感じがした。しかしそのときは自分がそこに住むことになるとは思ってもみなかつた。

もぐらのことは今でもよくわからないが多少政治的なところがあったのかな？革命

は農村からみたいな雰囲気がまだあったから。そこにアキラという北海道の百姓出身の少し年上の男がいた。アキラはまず民青、それから全共闘？と正義を求めていたようだが最後はヒッピーになった。アキラの口ぐせは今日楽しくない者が明日楽しいはずがない、だった。

数ヶ月してワカのところを出て、アキラと合流して原人と名乗り、同じ川内村のなかに土地があるという情報を得てその近くの農家にいそろうをした。そのころすでにボケとカップルだった俺とアキラ、チキ達数名で小さな畠をつくり、小さな小屋を作ったりして暮らし始めた。俺はまだ東京から来たばかりで思いばかりが先走っている状態でアキラの後ろを歩いていた。家なんか作れるの？って感じだったけど、アキラが地主さんとなにやら話してそこらの雑木を切ってたちまち家が出来てしまった。えーっこなんで家ってできるの？！

風呂はもらってきたドラム缶、たいして洗わないで入ったから油だけ、アキラはこれでいいんだと気持ち良さそうに入っている、あー開拓なんてこれくらいじゃないとできないんだなと思った。

そのころちょうどキャラバンが福島を通った。理由はわからないがキャラバンの通過を“もぐらは”断ったらしく、キャラバンは俺達の谷地原人村を通つていった。そのころキャラバンはあちこちで若者を巻き込んでいて家出娘のような娘も何人か来て、自分達で作った粗末な家で食事どきは小さな畠から大根などとってきて料理したりと、新しい世界の始まりを感じていた。

アキラはキャラバンとともに北海道まで行き俺は残ったのだが、そこの土地交渉はみのらず近くのいわき市の高部と言うところに家と土地をみつけた。そのことを報告

するために俺も北海道に行く。もちろんヒッチハイクだ。そのころは何処へいくにもヒッチハイクだった。北海道ではキャラバンの連中が金山湖で祭りをやっていた。今思うとある意味この祭りが原点になっているのかも。こんなに楽しく平和なんだから毎日こうやって暮らせばいいんじゃないの？もちろん生産はやってないんだから持続は無理に決まってる。だけどその精神は毎日保てるはずだと。

その後アキラ達と高部に引っ越して高部原人と名乗って人も増え10人以上になったころ、もぐらが解散して無人になったからそっちに行こうと高部には3,4人残つて俺達はもぐらのいた楢へ。そのころは土地は誰のものでもないんだからという感じで地主のことなどまったく考えたこともなく、無断で“もぐら”から“原人”に入れ替わっていた。このことを後から人に言われて知った地主は大いに怒っていた。

ただで借りていたんだけど、やっぱり借りていたんではだめだと後に購入することに。なんだかんだ言っても結局こういうところは国の法律に従わざるをえないところは少しつらい。

もぐらの残していったプレハブ住宅に住み畠をやりながら開墾暮らし。



←ドラム缶風呂



くわを振るうたびに汗がしたり落ちる。これが生きてるってことか？！俺が一くわ振るうごとに世界が変わっていくんだ、という高揚感に満ちていた。今からおもえば部活みたいなものだが、本気だったし多分一番輝いていたころだと思う。若いころは一途に何かを信じができるが、逆にそのことが傲慢だと言える。所有しないとか、すべてを愛そうとか、皆やりたいことをやればいいとか、理想？のようなものは高かったけど、逆に理想が高ければ高いほど信念が強ければよいほどそれにそぐわないものは否定されてしまう、できないこと、ないもの求めているのだから最後は自分自身も否定されてしまう。

ある日働かないで食ってばかりいるやつに文句を言ったら、マサイはやりたくてやっているんだろう！と逆襲され気がついた。ようするに自分はやりたくて開墾していただけで人が自分の意にそぐわないからと否定するはある意味権力だ！自分があれほど否定していた権力をこの俺自身が振るっていたとは！

理想を求めて集まつたはずの若者集団もやはり心の争いからは逃れられなかった。

アキラはその後大鹿村に行き花開いた。アキラは荷物が二つあれば必ず重い方を持つ男で人には優しかったが自分にはきびしかった。それが寿命を縮めてしまったのか50代でなくなってしまった。（詳しくは人間家族“足に土、原人アキラ”で）俺はそんなアキラを反面教師に、人にも優しいが自分にも優しい生き方をしようと思った。

その後いろいろな人が猛に住みついでは去ったりをくりかえした。コミューンとは名ばかりで、すべてを愛すことなんてできもしないし、逆に自己嫌悪になってしまう。無所有と言ってもそれもできない。村づくりなんて程遠い、20代から20年くらいで挫折感におそわれてしまう。なにかの拍子に新聞に載った自分の写真を見てびっくり！えっこれが俺？太っているし、これじゃあもてない筈だ。

自給自足をめざしてきたけど自分がいくら頑張ってやっていても郵便配達のひとが

手紙を届けに来てくれて、その人のバイクの燃料はどうなんだ？！（実は山奥のため郵便は来ないんだけど）とまで考えると自給自足って個人でやるんじゃないんじやないかな？と疑問が。もちろんまずは個人、そして家族、地域、地球、はては宇宙全体で自給してるんだというところまでたどりついたとき楽になった。自給自足やるために生まれてきた訳でもないし、なんのための自給自足なんだとあらためて考えた時、自由に生きるためなどと明快な答えが出た！いろいろ頑張ってもそれが自由につながらず、かえってしばりになってしまうようなのはだめなんだ、とやっと気がついた。その時は50代になってしまっていたけど、挫折感から開放されて楽しい日々が再びおとずれ、また少しもてるようになったかも？

出来ないことをやろうとして、できないと嘆いていたが、できないということが分かったということは失敗ではなくて前進なんだ。若いころの一途な心、それはそれで素



敵だとおもうが、あれほど正しいと思っていたことが間違っていたということを経験するうちに、自分の考えていることはもしかして間違っているかもしれないといつても思うようになった。

そのことが傲慢だった心を少し謙虚にしたのかもしれない。思想や常識は変わってしまう。なにをよりどころに生きていけばいいんだ？嬉しいとか楽しいとか気持ちいいとか、こういうのはどんなに時代が変わろうと不变なんじゃないだろうか？まずは自分が嬉しい楽しいバイブルーションを発すれば、ギターの1弦を弾けば他の弦も共振するように、世界もきっと共振するはずだ。祭りはその体験の場だ、すべての祭りは愛の発信地！（満月祭のテーマ）

金山湖の祭り、猛に入ってすぐにやったトモ主催のサンダー、88年のいのちの祭り、などが原点になった満月祭。最初は山道を4、5時間歩いて行き来て高部原人とのお月見。

飲んでさわいでたりしてたのが、たまには好きなミュージシャンも呼ばうか？なん

てなってナミさんを呼んだりして数人から始まった満月祭だったんだけど、というより別に名前もなく友達とギターもってさわいでたのが友達の友達そのまた友達という感じでとうとう全然知らないやつまで来るようになってしまい、冗談で1000人位来たりしてなんて言ってたのが本当になってしまった。震災後は200人位に減ってしまったけど。

90年には“地球回帰の祭り”というのもやった。自分でやった祭りらしい祭りとしては初めてだ。トモにも協力してもらい全力でやって大成功だったけどそのあと燃え尽き症候群？とでもいうのか半年腑抜けになってしまった。話はあちこちとんでもうが、その後祭りはしばらくやらずにいたけど、星祭りとか満月祭とかそのたびにちがう名前でまた復活した。続けるためには全力を出すんではなくて楽にやるのが大事だと気がつくようになった。ある年もう面倒だからとやらない年があったんだけどその年にも人が来てしまい、ああこれはもうやるしかないなと思った。

だんだん人が増えて出店もキャンプ場からステージまでまるで商店街のようになってるし、かってにワークショップなんかやってる人もいる。朝はどこからともなく笛の音もする。えっ！これって俺が夢みてきた村じゃないか、あれほど頑張っても出来なかつた村がたとえ祭り期間中のたった一週間だったとしても今日の前にできている。必死で追い求めてきたものがあきらめたころ全く別の形で現れた。だれも管理も指示もしないのに自然に調和のとれた村ができていた。

青い鳥はやはり家にいた、しかし青い鳥を探す旅に出なければ家にいることには気がつかなかっただろう。

それからはずうっと満月祭はつづけようと思うようになった、人が来てくれるかぎりは。

紙面もつきたので震災のことなどはまたにかの機会があったら書かせてもらいたいと思います。

マサイ



今年の満月祭より↑ 写真；Macoto Fukuda